

Title	福沢諭吉の学問観：ミル、バッケル、スペンサーの諸著作へのノートを中心に
Sub Title	Yukichi Fukuzawa's aspect of sciences : through the marginal notes on the works of Mill, Buckle and Spencer
Author	安西, 敏三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.3 (1982. 6) ,p.457(229)- 470(242)
JaLC DOI	10.14991/001.19820601-0229
Abstract	
Notes	島崎隆夫教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉の学問観

——ミル、バックル、スペンサーの諸著作へのノートを中心に——

安西敏三

1

日本思想史上、福沢諭吉(1835—1901)は改めて言うまでもなく、最も多岐なイメージを醸し出している思想家の一人である。例えば、戦後35年の福沢評価をとってみても、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という「民主主義」の先覚者としての福沢像から、「脱亜論」という「帝国主義」の唱導者としての福沢像があり、さらには「近代化」が「西欧化」と等置され、その歪みが社会現象として確認される状況に直面して、福沢はこうした現象を生み出した「西欧化日本の先覚者」であるが故に、批判的ともなっている。正に「対象としての福沢諭吉は、つきしたがうべき存在から克服すべき存在へと変貌しつつある⁽¹⁾」と言っても過言ではない。

福沢研究史は一つの時代の流れを照射しうるのであるが、今はむしろ相容れない様々な福沢解釈があるからこそ、根源的な福沢理解がより一層求められているように思われる。その為には福沢の思想をその構成要素にまで分解し、その要素の由来なり意味を一つ一つ時代背景を念頭に容れながら調査しなおして、それらが各々福沢の中で如何なる形をとって彼の生活全体、及び全体精神に作用しているかを再検討し、そして改めて福沢の思想に対する従来の評価を検証してみる必要があるのではないだろうか。小稿ではその一つのステップとして、福沢の思想の根源的な構成要素の一つである学問観、即ち「実学」観を取り上げることにした。その際、未だ十分に着手されていない福沢が文字通り手にした洋書の中でも、J・S・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)、H・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)、H・T・バックル(Henry Thomas Buckle, 1821-1862)らのヴィクトリア朝自由主義を構成すると考えられる思想家の著作への、福沢自身による様々なノート(書き込み、不審紙貼付等)の調査の一部を紹介することによって、彼の学問観の有する意味について考えてみたい。この場合、福沢がそれらの諸著作の如何なる側面に着眼して如何なる側面に着眼していないかをみ、着眼している面においても着眼の意味、つまり、(i)同意確認なのか、(ii)学習摂取なのか、

注(1) 鹿野政直「解説」『福沢諭吉選集』第9巻、岩波書店、1981年、311頁。

(iii)留保疑問なのか、(iv)たんなる要約なのかに留意し、さらに西欧思想の理解の問題において、西周（1829-1897）、加藤弘之（1836-1916）と比較しつつ、福沢における受容の特徴を考察したい。

2

福沢の学問観を特徴づけるのが「実学」で、その「実学」もたんなる実用学ではなくて、数理学であり、またそれが「独立自尊」の精神と密接不可分であることについては、既に優れた研究によって明らかにされている。⁽²⁾そこで、ここではその「実学」の本質を形造る数理学の有する認識論的意味を、福沢が一体如何様に把握していたのか、という点を福沢自身の読書の跡を辿ることによって考えてみよう。

それには福沢が明治8、9年に愛読したスペンサー『社会学研究』（Herbert Spencer, *The Study of Sociology*, D. Appleton, New York, 1874）第13章「学科」（Discipline）への福沢のノートが恰好の史料になろう。本書は、知識社会学の先駆を告げるものとして、現在でも高く評価されているものであるが、⁽³⁾スペンサーは、そこで社会学を正しく学ぶ為の学科を次のように分類する。(i)関係の必然性を理解する為の数学・論理学に代表される抽象的科学 (the Abstract Sciences)。 (ii)原因と結果のつながりを認識する為の物理学・化学・機械学に代表される抽象的-具象的科学 (the Abstract-Concrete Sciences)。 (iii)継続性、複雑性、偶然性についての概念を生み出す具象的科学 (the Concrete Sciences)。そしてこの (iii)は、原因の持続性を考える訓練をもたらす天文学・地理学に代表される非有機的-具象的科学 (the inorganic Concrete Sciences) と、それをより明確に強く、そして因果関係を実り豊かに認識させる生の科学 (the Science of Life) である生物学・心理学に代表される有機的-具象的科学 (the organic Concrete Sciences) とに分けられている。スペンサーはこの四つの科学を各々マスターすることが社会学を専攻する際重要であると述べているのである。しかも、これらの科学の分科論はそのままスペンサーの学問進化論に符合すると思われる。従って最も重要なのは生物学・心理学を含む有機的-具象的科学になるわけで、以下14、15章では、それとの関連で社会事象の社会学的説明が行なわれている。

さて、問題はこれらのスペンサーの学科論に対する福沢の反応であるが、福沢はスペンサーの叙述に従って各々の学科の特徴を把握して毛筆で書き込んで行く。第一の抽象的科学については、事物関係の了解手段として必要ではあるが象徴に支配される精神界の了解手段として不十分である、とスペンサーが述べている所に「アブストラクトサイヤンスヲ修メサレバ事物ノ関係ヲ了解スルニ

注(2) 丸山真男「福沢に於ける『実学』の転回—福沢諭吉の哲学研究序説—」『東洋文化研究』第3号、1946年、1~20頁。

(3) Talcott Parsons, Introduction in *The Study of Sociology* by Herbert Spencer, Michigan, Ann Arbor Paperbacks: The University of Michigan Press, 1961, p. VI.

「ナシト雖モ實際ニ之ヲ精神ニ移シテ活用スルヲ甚難シ」と福沢は書き込み、さらに数学者は不慮の出来事の予測に対して適切な判断を下しえない、とスペンサーがその一例をあげている所に、福沢は「譬ヘハ数学家ノ愚ナルガ如シ」と書き込む。次いでスペンサーが、物理現象や化学現象の因果関係を明晰にすることによってえられる様々な法則を認識する知的訓練は正確に思考する習慣をもたらす、と述べて抽象的-具象的科学の修得を説いている正にその所に福沢は「依テ実学ニ従事セサル可ラズ」と書き込んでいる。「実学」に相当する用語はそこにはない。従って福沢自身がスペンサーのいう抽象的-具象的科学を指して「実学」と規定していることが、ここからわかる。

この点を念頭にいれておいて、さらに福沢の書き込みをみて行こう。スペンサーは、抽象的-具象的科学は因果関係が考察の中心となっており、例外的な因果関係をもつ現象や因果関係が必ずしも明確ではない現象を説明できないと述べ、さらにそれは絶えず実験を行ない、因果関係の確固たる認識を人にもたらすけれども、学問訓練としては不十分であって、しかもより高度な現象を解明する際、それは誤った結論を導くと述べ、物理学研究のプロセスが本質的に分析的であって、この分析は目的にとつての要素の解釈、確証、考量、及び調査結果がその究極目的になってしまう、と指摘する。福沢はこれを受けて「然ルニ爰ニ不足アリ譬ヘハ工学先生家ヲ建ルノ術ヲ知ルモ大工左官ヲ御スルノ法ヲ知ラズ」と卑近な例を出して書き込む。抽象的-具象的科学のみでは因果関係の考察にあまりの重点を置く為、その整合性を確証することが第一次的目的になってしまい、研究者はそこから自分に都合の良い解釈を加えて問題を解決したと錯覚する、とスペンサーは考えているわけである。この方法では複雑きわまる現実の現象を解明できないのである。福沢はこれを要約して「有形物ニ対シテ精神ヲ縛ル片ハ兎角事物片付ケタリ思フ様ニナルモノナリ」と書き込む。

スペンサーにとって現象の形式研究である抽象的科学は必要ではあるが十分ではなく、現象の要因研究である抽象的-具象的科学は本質的ではあってもやはり十分ではない。彼にとって重要なのは「生産」的なことでなければならず、その研究に必要不可欠な方法は「総合」であって、これこそが第一次的に要求される。従って抽象的-具象的科学の得意とする分析は「生産」研究に必要な「総合」に至る予備的機能である。また知性の正しいバランスの為にも、それは手段であって「総合」こそが目的でなければならない。福沢はこの議論を「アナリシスハシンセシスノ術ナリ」と要約して書き込む。そうしてこの「総合」的視点を培うのが、スペンサーによれば、他ならぬ具象的科学なのである。

ところが、福沢はこれ以上の書き込みを第13章でしていない。ただ一箇所『覚書』に「人事に於て此処に一の変化あれば彼処に其余波を及ぼすこと、足に怪我をして之が為め全体の身振を不変する如し」⁽⁴⁾(⑦664)と、有機体における部分と全体との関連についての感想をノートしているにすぎない。

注(4) 『福沢諭吉全集』第7巻、岩波書店、1970年、664頁の引用を示す。以下「全集」からの引用・参照も同様。

これらのことは一体何を意味するのであろうか。スペンサーが正に彼にとって科学中の科学である生物学・心理学に説き進もうとしている所で、福沢はノートを十分とっていないのである。福沢の本書読了時である明治9年3月14日以降の彼の著述をみても、彼は学問の範型を生物学・心理学に変更することなく、依然として物理学にしていることを合わせ考えると、福沢はスペンサーの学問進化論に賛意を表していないことがわかる。例えば明治15年という進化論の流行時に「物理学之要旨」を著し、そこでスペンサーが具象的科学で要求した「偶然性」に立つ因果論について「偶然に非ざる」物理学の西欧文明にもたらした意義を述べることによって否定的見解を呈し（⑤1）、さらにスペンサーからえたとと思われる生物学に社会学が結びついて生まれた社会ダーウィニズムを「妾の功能」という漫言で、どちらかというとな化していること（⑩15-16）、同じく「真言秘密は以て夫婦喧嘩を和するに足らず」というやはり漫言において、社会ダーウィニズムの自己検証性の不可能性を述べ、それに立つ弱肉強食の論理が天賦人權論者に逆用されることを加藤弘之の『人權新説』——天賦人權論を弱肉強食論者の立場から砂上の楼閣として批判し、自ら天賦人權論者から弱肉強食論者への「転向」を表明した加藤の代表作——の書評を通して明らかにし、福沢の眼に映ずる現実が社会ダーウィニズムの述べるところではないこと（③385-387）を論じていることなどからもそれは察しがつく。

さらに、よく福沢の弱肉強食論者への「転向」を示すと言われている「遺伝ノ能力」（⑤56-62）をみても、それは武士精神の肯定的側面が平等化によって失われていく悲劇を説いたものであって、必ずしも社会ダーウィニズムに対する賛意を表明したものではない。また福沢が本当に生物学や心理学をスペンサーの奨励に素直に従って、科学中の科学として同意確認あるいは学習摂取するならば、福沢がスペンサーの『生物学原理』2巻（*The Principles of Biology*, Vol. I, II, D. Appleton, New York, 1874）『心理学原理』2巻（*The Principles of Psychology*, Vol. I, II, D. Appleton, New York, 1874）を、仮令福沢の生物学及び心理学の常識をスペンサーのこれらの本が超えるものではないと福沢が考えたとしても、何等かの形で繙いていてもよさそうであるのに、ほとんどその形跡がないことから、福沢の学問関心の傾向がわかるのである。

それでは何故に福沢はスペンサーに倣って生物学ないし心理学を学問の範型にしなかったのであろうか。即ち福沢は何故に物理学・化学・機械学を「実学」と自ら好む名辞、自らあるべき学問についての呼称を以て書き込み、生物学・心理学を「実学」と読まなかったのであろうか。心理学はともかく、福沢はスペンサーのいう生物学を理解しえなかったから、と言えばそれは恐らく誤っているであろう。福沢とてスペンサーの奨励する科学の最高段階としての生物学を、仮令その実体に多少の相違があろうと、また蘭学を通じたものであろうと、スペンサーを理解する程度には適々斎塾で学んでいるはずである。ということは、生物学の特質を考慮にいれても、物理学を学問の範型にする理由が福沢にはあったということである。スペンサーの学科論について言えば、スペンサー

が具象的科学の本質を規定するものとして重視する分析-総合的方法的手続は、福沢にあってはむしろスペンサーの学科分類に従えば抽象的-具象的科学の有するものなのである。事実この方法的手続は、歴史的には元来進化論を正当化させた生物学が確立したものではなく、それに先立つむしろ物理学を基礎科学とする啓蒙主義的思考方法の有するものであるから、福沢が具象科学を以てその唯一の代表者とみる必要はなかったと思われる。つまり福沢は抽象的-具象的科学こそ学問の範型になりうる、とスペンサーの学科論を通読した後も確信しているのである。従って福沢の具象的科学についてのノートは、スペンサーのいう抽象的-具象的科学の陥り易い惑溺への注意とみるべきである。

しかしながら、次のような反論が出るかもしれない。福沢は『覚書』で「学問の要は事物のリレーションを知るに在り。蟬は螳螂に捕られ、螳螂は雀に、雀は鷹に、鷹は獵師に撃たるゝと云ふも、無学の然らしむるものなり。或は事物に気の付かぬと云ふも可なり」(⑦670)と記し、「教育之事」で「学問の要は唯物事の互に関り合ふ縁を知るに在るのみ」(④421)と展開している故、むしろここでいう抽象的科学こそ学問の本質と福沢は考えていたのではないかと。成程これらは「リレーション」認識であるから、スペンサーのいう抽象的科学の有する性質かもしれない。けれどもこれは、福沢は記していないが、やはり明治9、10年に読んだスペンサー『第一原理』(*First Principles of a New System of Philosophy*, D. Appleton, New York, 1875)第1部第4章「すべての知識の相対性」の所の一節の福沢なりの要約なのであって、福沢手沢本をみると、ここに「事物ノリレーション」との書き込みがあり、福沢が『覚書』にノートする予備的形跡を認めることができる。この箇所は、スペンサーが一定の内界の物理化学的作用と一定の外界の物理化学的作用とは対応関係にあることを論証したものであって、抽象的科学というよりもむしろ物理化学という名辞から判断してもわか

注(5) E・カッシーラー『啓蒙主義の哲学』中野好之訳、紀伊国屋書店、1962年、11頁。

(6) このことが福沢をして個人主義原理を欠落させた社会有機体説の導入を拒ましめた一因と考えられる。福沢の社会有機体説や社会ダーウィニズムの摂取あるいは拒否については別稿に譲らざるをえないが、スペンサー『社会学研究』第14章「生物学の準備」において「政体ノ体ノ字ハ譬ニ非ズ事實ナリ」とか「社会ノ有様ハ如何ニモ生物体ノ通りナリ」とスペンサーの説を要約して書き込んである。けれどもこれがあるからといって、通俗のスペンサー評価に従って福沢は天赋人權論を放棄する契機をスペンサーからえたとするのは誤りである。福沢の場合、仮に社会有機体説を導入したとしても、スペンサーがそうであったように、社会有機体説と天赋人權論とは必ずしも矛盾するものではないとしているのである。福沢の天赋人權論は、この場合「不羈独立」と結びつくが、社会の競争原理よりも社会の調和原理にこそふさわしいものである。このことはミル『功利主義』第3章「功利の原理の究極的強制力について」への書き込みからも察することができる。ミルが社会的感情が発達している人ならば、自己の幸福実現の為に同胞の目的が挫折することを望むことはないと言っている所に、福沢は「果シテ然リ人ヲ待ツニ及ハズ独立ノ氣象トハ蓋シ比辺ニ存スルモノナリ」と同意確認している。これは人間性に社会性が備わってきているという解釈に立つ「独立ノ氣象」と考えられるから、それだけ個人の独立の観念が西欧近代国民国家を形成する際、不可欠に要請された社会契約説の前提となる人間の社会性を一旦切断した個人の独立の観念程には強くない。ただし、本文でも触れた弱肉強食論を正当化する、あるいは滅私奉公の機能を果たす、社会ダーウィニズムや社会有機体説の理解と福沢のそれとは鋭く対立するものであるという点は注意されてよい。近代日本における社会有機体説の摂取が一般に福沢のそれとは異なって個人主義原理を欠いたものである点については、石田雄『明治政治思想史研究』未来社、1954年、67-104頁、参照。

るように、有機的－具象的科学への契機をもつ抽象的－具象的科学の特質とみてもよいのである。
しかもこの認識の相対性こそ価値判断の相対性に連なる福沢諭吉の哲学であるが故に、抽象的－具象的科学と福沢の哲学とは不可分な関係にあるわけである。

また福沢が抽象的科学を学問の範型にしなかったのは、それがどちらかといえば、明晰判明な公理や定理から出発し、具体的事象をその論理的必然として演繹するからと思われる。これは恰も絶えず検証しつつ真理原則の発見へと導く「実学」を妨げる儒教精神の代表として、福沢が批判して止まない、陰陽五行の変化を以て大は宇宙事象から小は日常起居の修養法に至る天地人三才を演繹する朱子学的合理主義のメダルの反面の如き様相を呈しうる。公式主義に陥る契機をもつことにおいて両者は紙一重なのである。

こうした福沢の学問観はその背景にある学問的伝統と無関係ではない。それには、(i)豊後学の伝統、(ii)内職の手工労働・迷信に対する懐疑と実験による検証、(iii)適々斎塾での学問訓練が主としてあげられよう。⁽⁷⁾これを福沢とともに明治期洋学者の代表的思想家と称せられる西周や加藤弘之らの学問的伝統と比較してみると、福沢が他の二者と異なっており、スペンサーの言う抽象的－具象的科学により多くの同意と関心、あるいは理解を持ちうる事がわかる。

西周は自ら述べているように、(i)家業である医学（伝統的漢方医）、(ii)漢学である朱子学、(iii)病床に臥して開眼した徂徠学をへて、(iv)洋学（蘭学から英・仏・独学）や(v)兵学に入っていく思想家で

注(7) 丸山真男「福沢諭吉の哲学—とくにその時事批判との関連—」日高六郎編『近代主義』『近代日本思想大系』第34巻、筑摩書房、1964年、58-92頁。

(8) (i)は福沢が青少年期を過した中津近辺の国東半島富永村に生まれ生活を送った三浦梅園（1723-1789）に始まり、脇蘭室（1764-1814）をへて、福沢の父や兄が師事した帆足万里（1778-1852）に結実する学問的伝統を指す。梅園学の特徴は、(a)自然界の法則（「条理」）認識、(b)弁証法的ないし分析－総合的認識（「反観合一」）、(c)懐疑精神に立つ価値判断の留保（「物を怪しめいぶかる心」「捨心之所執」）、(d)判断規準の相対性の認識（「依徴於正」）を大略あげることができる。この学問観は、同時に認識主体の自主性と対等性を生み、従来の学問の中心であった四書五経（「書上の学問」）に新たに自然界を対象とする学問（「事上の学問」）が加わる。後者の認識手段は実験を意味する「実測」である。この梅園学を脇蘭室によって教えられた帆足万里は、物理学を導入して『窮理通』を著わし、コペルニクス、ケプラー、ホイヘンス、ニュートンを紹介する。そして学問を「大物」（梅園のいう「書上の学問」）と「小物」（梅園のいう「事上の学問」）とに分別し、「小物」の「大物」に劣らない重要性を指摘している。つまり「大物」は「文辞の学」であって、詩書礼楽を指し、「小物」は「日用の学問」であって、物理の学としての算術・経済学・医学・物理学を指し、「日常の学問」の「文辞の学」に対する対等権を要請しているのである。ただし万里は、梅園と異なっており封建的身分秩序の維持強化が一面的としてあった為、自然科学の追求からくる認識主体の対等性の思想は稀薄である。彼が「大物」の学の教化の為に提唱した俗文翻訳主義も福沢と異なり、封建的身分秩序の強化の為にであった。従って人間平等主義を内在している仏典の俗文翻訳は勧めなかった。人間平等観が現実化・社会化するのを万里は恐れたのである。(ii)については改めて説明を要しないであろう。あらゆる文明において実験は手仕事に根差し、因果論的思考法の開拓者は職人であった（E・ツォルセル『科学と社会』青木靖三訳、みすず書房、1967年、67頁）ことを付け加えるに留める。(iii)についても周知のことなので何等説明を要しないであろう。物理・化学・解剖学・生理学の学習と、それらの基礎実験に対する深い関心は、福沢の学問観を形成する上での原体験ともいえるべきものである。(i)～(iii)他、豊後学の影響下にある白石照山塾での実証的な徂徠学の修得や長崎での兵学の修得があげられる。以上の点については、高橋誠一郎「梅園、万里及び福沢先生の経済論」『三田学会雑誌』第27巻第1号、1933年、1-91頁、田口正治「三浦梅園」吉川弘文館、1967年、帆足図南次「帆足万里」吉川弘文館、1966年、小泉信三「福沢諭吉」岩波書店、1966年、110-116頁、ひろたまさき「福沢諭吉研究」東京大学出版会、1976年、17-52頁、今永清二「福沢諭吉の思想形成」勁草書房、1979年、8-78頁、源了円「徳川合理思想の系譜」中央公論社、1972年、195-231、295-317頁、など参照。

ある。西が思想形成期を過ぎた津和野近辺に豊後学に匹敵するような学問的伝統はなく、また西は福沢と異なって正統的学問訓練を受けていることから、豊後学にみられるような自然科学への着眼は、朱子学を通しての解釈はありえても、十分に行き届かなかったと思われる。西の論理学や学問論を形成するのは豊後学の如きものよりも、朱子学（コント実証主義の受容基盤）であり、徂徠学（ミル倫理学の受容基盤）なのである。⁽⁹⁾

同様に藩校での(i)朱子学、(ii)徂徠学、(iii)仁斎学、佐久間象山（1811-1864）から学んだ(iv)蘭学及び(v)兵学の学問的伝統を背景にもつ加藤弘之も、福沢の如く手近な日常性から出発する学問よりも、むしろ兵学が家学であることと関連して、治者の学問に魅せられていることが自伝その他でわかる。むしろ兵学そのものについていえば、西はいうまでもなく福沢もマスターしており、加藤のみの固有に帰せることはできないけれども、相対的にいって他の二者より彼の学問領域に占める位置が大きいといえる。

このようにみてくれば、福沢が西や加藤と異なって、仮令素朴なものであれ、物理を中心とした自然科学的思考方法を培う学問的伝統をもつ環境に育っていることがわかるであろう。そうしてこの学問的伝統があればこそ、福沢は欧米に行って物理学入門書をも購入し、わかりやすく翻案して人々の啓蒙に努めたのである。西や加藤がそうした翻訳翻案書をものにしていないことと比較すれば、福沢の物理学を中心とする自然科学への並々ならぬ情熱がわかる。また、こうした学問的伝統の相違が彼らの西欧思想の受容のパターンをも特徴づけて行く。次に、それを再びスペンサーの学科論に即して考えてみよう。

豊後学の伝統や福沢の職人的手工労働及び適々齋塾での物理・化学を中心とする実験好きは、たんなる抽象的科学を、あるいは具象的科学を学問の範型にはしなかった。西周はその点、当時の正統的エリート教育を受けているが為、朱子学に比較的なじみやすい抽象的科学、あるいは具象的科学をより多く摂取しえたであろうと思われる。西はスペンサーの学科論に影響を及ぼしたオーギュスト・コント（Isidore Auguste Marie François Xavier Conte, 1798-1857）の「実証科学のヒエラルヒー」（数学→天文学→物理学→化学→生物学→社会学）を主とする学問体系論、即ち「統一の観」＝哲学と「実理の諸学」で「基本の五学」＝天文学・物理学・化学・生物学・社会学をレーベス（G. H. Lewes）を介して導入し、『尚白劉記』において展開している。福沢の基本学が抽象的・具象的科学の物理学・化学であるのに対して西はこれに非有機的具象科学である天文学、有機的具象科学である生物学、さらにこれらの学問の目的である社会学を付け加えている。また西は、数学の公理、因果の原理の必然的真理が如何に論理的必然の信仰の正確さをもって連想の法則と作用に従い

注(9) 小泉仰「明治初期の倫理思想研究のための序論」『商学部日吉論集』第2号、1965年、1-22頁、同、第3号、1966年、1-22頁、同第4号、1-26頁、鈴木秀男「西周」『一橋論叢』第47巻第4号、86-119頁、植手通有『日本近代思想の形成』岩波書店、1974年、185-196頁。

つつ経験によって生ぜしめられたかを証明しようとしたミル『論理学体系』(System of Logic)⁽¹⁰⁾を導入しているのに、福沢はこれを受読していない。加藤弘之は自ら己れの立場を自然科学主義と規定する位、科学の進歩に絶えず追って行く傾向がある故、スペンサーにならって有機的-具象の科学を最重視するであろうことは自明と思われる。加藤の学問的伝統は、福沢と異なっており、実用学といっても兵学や朱子学・徂徠学をも含めた治者のそれであるからして、現存秩序を首肯する契機をもつ有機的-具象の科学を導入しても不思議ではないからである。

福沢が「実学」と規定した抽象的-具象の科学は具体的事象から出発する。そのプロセスは観察-実験-法則の発見-検証をくり返す試行錯誤の連続であり、唯一絶対の真理から総てを演繹しない。また認識方法において思弁-演繹ではなく検証-帰納の理念がどちらかといえば重視される。これは現代科学哲学からみればむしろ素朴な科学論と思われるであろうが、少なくとも福沢の時代にあっては言い得ると考えられる。

それでは福沢が社会科学において、あるいは社会現象を研究するのに、如何なる方法論を西欧思想から学び取っているのであろうか。社会ダーウィニズムの福沢における導入については、否定的見解をも含めて先に少しふれた。また福沢が社会ダーウィニズムを導入したとしても、そこに個人主義原理を欠落させなかったことも指摘しておいた。⁽¹¹⁾そこで、次にスペンサーに先立って福沢が愛読したH・T・バックル『イングランド文明史』(Henry Thomas Buckle, *History of Civilization in England*, Vol. I [1873], Vol. II [1872], D. Appleton, New York)の方法論をとりあげよう。本書はJ・S・ミルの影響下⁽¹²⁾にあつて、しかもスペンサーによって冷評されているが、福沢にとってはその生涯の中でもひととき輝くものであったにちがいない。『文明論之概略』や『学問のすゝめ』におけるバックル説の展開をみれば、そのことは容易に察せよう。⁽¹³⁾

3

福沢手沢本として今日伝わっているバックル『イングランド文明史』には『文明論之概略』を著わすにあたって多くを参照したギゾー『ヨーロッパ文明史』英訳本(M. Guizot, *General History of Civilization in Europe from the Fall of the Roman Empire to the French Revolution with Occasional Notes*, by C. S. Henry, D. Appleton, New York, 1870)と異なっており、福沢によるノートがあまりみられない。⁽¹⁴⁾この本はギゾーのと違って製本が立派な為、不審紙の貼付はしても、直接の書き込みは控

注(10) W・L・ディヴィッドソン『イギリス政治思想』第Ⅲ巻、堀豊彦・半田輝雄訳、岩波書店、1953年、125-126頁。

(11) 注(6)参照。

(12) H. J. Hanhan, Introduction in *On Scotland and the Scotch Intellect*, by Henry Thomas Buckle, The University of Chicago Press, 1970, p. XVIII.

(13) David Wiltshire, *The Social and Political Thought of Herbert Spencer*, Oxford University Press, 1978, p. 67.

(14) 赤・青・緑の不審紙貼付箇所は30か所あり、毛筆でメモした和紙が7か所に挟んである。

え、必要なメモを和紙に毛筆で記して、それを挟んで置いたようである。そして『文明論之概略』や『学問のすゝめ』を著す際、必要なメモを随時引き出し、不必要なものについてはそのまま残しておいたと思われる。バックルに関する限り、ギゾーについて試みられた如く、⁽¹⁵⁾『文明論之概略』との明確な対応の跡を手沢本から追うことは困難である。けれども福沢とバックルとの照合は既にある程度解明されている故、⁽¹⁶⁾ここでは簡単にバックルの学問観（主として歴史学方法論と学問主体の精神態度について）を紹介して、福沢におけるその摂取の特徴について触れることにする。

バックルが歴史に自然科学と同じような明晰な方法と法則とを確立しようとしたことはよく知られている。科学としての歴史学の樹立の為バックルは、(i)統計学 (statistic), (ii)比較 (comparison), (iii)総括 (exhaustive methods) の三方法を用いるよう提起する。(i)は人事百般には同一性が存在することを証拠づけるもので、例えば年間の自殺者数、男女の出生比を提示し、そこから人間世界に一定の画一性があることを立証するものである。(ii)は実験モデル——バックルの場合具体的にはイギリス文明——を規準にして比較の対象である他の文明との相互関係を認識し、各々の文明の特徴を引き出すもので、一定の条件下で一定の法則を発見する為に不可欠な操作である。(iii)は(i)や(ii)によって得た資料を大局的にみて、そこに存する法則を発見することである。例として、福沢自身不審紙を貼付して『文明論之概略』に紹介している婚姻数と穀物の物価との関係をみてみよう。ある年の婚姻者数と穀物の物価の統計表を作る。これを数年間行なって、これに関する年ごとの比較を行なう。そして総括すると、穀物の物価が高いとき（原因）婚姻は少なく（結果）、逆の場合は多い、という相互の因果関係の法則が発見できるというのである。これもやはり卓上の議論というよりは具体的な統計上の数値をみて、それと他の統計上の数値とを比較することから、抽象的な相対的關係の因果法則を見出す帰納的作業であると考えられる故、先にあげたスペンサーの学科の中では抽象的－具象的科学の方法的手続と一致すると思われる。歴史をこのような方法で描くと、それは従来の事実羅列主義に立脚する歴史ではなくなる。即ち、具体的事実を科学的方法によって抽象化して法則を発見する歴史となるわけである。それでは、こうした歴史学方法論は福沢によって如何様に受容され展開されているのであろうか。

福沢は、バックルの第一の方法である統計学を「広く実際に就て詮索するの法」として紹介し、比較や総括については「天下の人心を一体にみなして久しき時限の間に広く比較して、其事跡に頭はるゝものを証するの法」として紹介しており、これらの有する帰納的方法として福沢は「近因より遠因を導け」と言って展開し、さらにこれが「確實不拔の規則」を認識する上で最も重要である、と言っている（④54-50）。これは具体的事象から抽象的因果法則を発見せよ、とするスペンサーの

注(15) 小沢栄一『近代日本史学史の研究—明治篇—』吉川弘文館、1968年。

(16) 小泉前掲書、119-129頁。松沢弘陽「文明論における『始造』と『独立』—『文明論之概略』とその前後—」『北大法学論集』第31巻第3・4合併号、下巻、1981年、359-375頁。

学科でいう抽象的－具象的科学の手續である。

バックルの歴史学方法論が福沢の「実学」と密接に関わっていることは以上で理解されたとして、次に学問主体の有様についてのバックルの考えと福沢におけるその摂取についてみてみよう。

4

バックルが学問主体に要請したのは、(i)懷疑精神、(ii)探求精神、(iii)観察・実験精神である。(i)は懷疑がなければ進歩は不可能とする懷疑の原則（Principle of Scepticism）からくるものである（福沢はボイルが己れを「懷疑的化学者」と規定しているバックルの叙述の所に不審紙を貼付している）。(ii)はやはり(i)との関連からくる。即ち懷疑のない所に探求はなく、探求のない所に学識は存しないとの原則からくるものである。(iii)は物理学研究者が有している核心的心構えであって、迷信を拒否し自然を克服する基礎としている。知性の自然に対する優越を(iii)はもたらすのである。そうして、ヨーロッパ文明が非ヨーロッパ文明に、またヨーロッパ文明の中ではイングランド文明が他のヨーロッパ文明に優越しているのは、それらの精神が相対的に言ってより広く着及しているからである、とバックルは述べる。しかもこれらの精神の普及は同時に(i)私的判断の不可侵権の尊重、(ii)(i)からくる個人の理性や学識が信仰からくる信念に優さる（ここに福沢の不審紙貼付あり）為に既成の特権階級の権威の否定、(iii)自由かつ独立な個人の析出、(iv)学問の民衆化とこれと不可分な出版の自由、(v)政府と教会の歴史に代わる民衆史（the History of a People）の登場などをもたらす、と17,8世紀のイングランド知性史を典型的な例としてバックルは論じる。

福沢は、バックルが要請した学問主体の精神態度の中で最も重要な懷疑主義を周知のように『学問のすゝめ』第15編において「事物を疑ひて取捨を断ずること」として「信の世界に偽作多く、疑ひの世界に真理多し」と摂取している（③123-129）。梅園の主張した懷疑主義や弁証法が意識的にせよ無意識的にせよ福沢に内在していたとすれば、このバックル思想は主観的には同意確認の上での受容であったかもしれないが、客観的には福沢にとって文明の精神に連なるものであったといえる。またバックルが訴えた探求精神や実験精神は、やはり『学問のすゝめ』第12編で『ラブセルウェーション』とは事物を観察することなり。『リーゾニング』とは事物の道理を推究して自分の説を付ることなり（③103）と摂取されている。さらにバックルの要請する学問主体の精神態度の帰結としての「自己判断」や既成権威の否定にせよ、梅園の「事上の学問」とそこからのデモクラティックな精神からみれば同様に受容可能であったと思われる。また自由かつ独立な個人析出については福沢の独占用語ともなった「独立自尊」と結びつくし、学問の民衆化と出版の自由も俗文主義をとって『学問のすゝめ』その他の啓蒙書を著わしていること自体バックルに同意確認、あるいは学習摂取していることを立証している。民衆史の登場についていえば『文明論之概略』の問題意識

——「衆心発達論」としての文明論（④3）、「日本国の歴史はなくして日本政府の歴史あるのみ」（④152）——が正にそれであったわけであるからして、これもバックルに賛同しての福沢なりの展開であった。

バックルが懐疑精神を述べて、その中心となるべき学問を物理学にしていることも福沢の学問的伝統から解して同意確認であったし、生物学に対する留保疑問を助けるものであったと思われる。それではバックルの学問観の受容についてきわめて対照的様相を示す加藤弘之の場合とこれを比較してみよう。

加藤は、その自伝や『人権新説』さらには『自然と倫理』の中で、バックルが自己の「転向」の最初の契機となったと述べ、バックルの思想を、(i)形而上学の荒唐無稽と自然科学万能主義、(ii)社会の進歩は自然現象に左右されるという風土決定論である、と紹介している。バックルのこの思想は『イングランド文明史』第1巻第1章と第2章で述べられているが、バックルがここで形而上学を批判しているのは、それと比せられる神学とともにである。即ち、人間の行動様式は機会説と必然関係説の何れかの影響を受けるが、自然法則の発見につれ、前者は後者にとって代るが、文明の進歩とともにそれらは各々内面化して、自由意思説と予定説になり、さらにそれらを主張するのが形而上学者であり神学者である、とバックルは言っているのである。そうして前者は自由に因果論はないとし、後者は絶対的精神の支配を唯一信ずる独断に陥っているとし、何れをもバックルは批判する。バックルは、一定の状況下では一定の結果が生まれなければならないとして、結局精神に及ぼす外界現象の作用と外界現象に及ぼす精神の作用との二重作用の結果として、人間の行動様式を分類し、科学としての歴史学を樹立しようとするのである。しかるに加藤が念頭において批判している形而上学や自由意思説とは、周知のように天賦人権論を指しているのである。それに反してバックルは天賦人権論を指して言っているのではない。さらに自然科学万能といってもバックルは自然科学と形而上学とを架橋するものとして歴史を位置付けており、やはり加藤の考えている如き自然科学万能主義ではない。

先に見たように、バックルが不可侵権として私的判断を重視し、17,8世紀の天賦人権論が生まれたイングランド文明を規準として尚それが一個の目標たりうるとしていることや、自然よりも精神の働きを文明の優位の根拠としていることなどから、むしろ加藤が批判しようとした天賦人権論者にバックルは近いと考えられる。さらに福沢も注目して「騒動ハ無學且短氣デモ決シテ一般ノ深キ源因ヲ吟味シ能ハサルモノ狂氣ランキ挙動ナリ革命ハ国人ノ所為ニテ最貴重ナル美頭ナリ何如トナルハ災害ノ因テ生シタル怒リノ修身質ス迄前見兼ニ集合ノ才カラ加フル故ナリ且暴君巧吏ヲ罰シ無辜ノ民ヲ助ケ二重ノ益ヲナセルナリ」とメモした和紙を挟んでいるように、暴動と区別された革命の肯定など、「転向」せんとする加藤が読んだら到底承服しえないと思われることが、バックル文明史には著わされているのである。自然力に支配されるといっても、バックルはそれを見極め、己

れの主体性の確保をこそむしろ謳っていると考えられる。そうでなければ、バックルが当時アマチュア学者や中間階級、あるいはロシアのナロードニキなどに圧倒的影響力⁽¹⁷⁾を行使しえた理由が理解できなくなるのである。バックル『イングランド文明史』は加藤が援用した意図にはむしろ反する書とも読めるわけである。

この点福沢は、例えば加藤がバックルの説とした自然決定論に留保を示しており(④148)、安易にバックルの一部の説を加藤の如く受容していない。加藤のバックル理解は木を見て森を見ずと言っても過言ではないが、加藤に比較して福沢はどこまでもバックルの説いた懷疑主義の原則で以て自己判断権を行使しているといえるわけで、既成品としてのバックル学説の一部をそのまま鵜呑みにしているわけではない。バックル思想の根源的なものを把握し、それを自ら検証して福沢は摂取していると言えるのである。

無論、見方によれば、加藤が自分の説を展開するのにバックル説の一部の都合の良いところのみを引き出して、バックルの名によってオーソライズしている点、及び彼のノートである「疑塗備忘」でミルとともにバックル開化史が生物学的進化論を知っているが緊要と見做さない、と不満を述べていることなどを考慮すれば、加藤なりの主体性はみられる。けれども加藤は福沢と異なって、自然科学的知識によって理念や規範を事実や法則に解消してしまう価値シニシズムに陥⁽¹⁸⁾っていることから、バックル理解を不十分にしていることは否定できないと思われる。

それでは学問する主体としての「学者」を福沢は如何様に考えていたのであろうか。これまでとはやや異なった視点から、これをスペンサー『第一原理』及びミル『功利主義』並びにバックル『イングランド文明史』の各々の福沢手沢本を参考にして最後に紹介したい。

5

福沢はミル『功利主義』第2章に「大幸福ノ旨ハ苦痛ヲ去テ楽ニ富ムニ在リ而シテ其幸福ノ性質ヲ判断スルニハ自誠自存ノ習慣ヲ兼テ事物ノ実験ニ富ミ利害得失ヲ比較スルノ働アル人物ヲ要ス結局世ニ先テ人ヲ導キ一般ノ手本ヲ示スハ学者ノ職分ナリ今ノ学者決シテ迂濶ニ日ヲ消ス可ラズ行状ハ正シカラザル可ラズ働ハ活発ナラサル可ラズ」と興味ある書き込みをしている。ここで福沢が記した「大幸福ノ旨」はミルの言う「最大幸福原理」のことで、具体的には量質とも苦痛ができるだけ除かれて楽しみができるだけ豊かにある生活を指す。そうして自己意識と自己観察の習慣をもって、比較的方法で自己の豊かな体験を抽象化する能力保持者が質の判定規準及び質と量とを比較考

注(17) H. J. Hanhan, Iibd., pp. XXIV-XXV. Sir Leslie Stephen, *The English Utilitarians*, Vol. III, Augustus M. Kelley, New York, 1968 (Reprint), pp. 344-345. 小泉前掲書, 121頁。

(18) 松本三之介『近代日本の政治と人間』創文社, 51-53, 61-92頁。

量する準則を把握しうるのであって、これを福沢は「学者」と把握したのである。ミルの議論を要約しつつミルの議論から離れて「結局」以下において学者職分論を福沢は述べているのである。即ち、福沢にとって学者は快苦の質の判定規準及び快苦の質と量とを比較考量する際の準則を己れの経験に照らして把握し、それを示し、同時に具体的な日常生活において一般の人々に手本として品行方正な自己を積極的に示さなければならないのである。

福沢が学者にモラリストたることを要求する基盤の一つには意識せざる伝統的道学者観があるかもしれないが、むしろそれを克服する一契機となったバックルの智徳論⁽¹⁹⁾があると考えられる。バックルはミルやスペンサーと異なり、道徳は静止していて知性は進歩するという説を取るが故に、知的優越者に智徳の具現者をみる。福沢はこのバックル説を周知の如く文明論において摂取展開している故、ミルを読んでモラリストとしての学者像に同意確認していると思われる。そうして文明論執筆以降、福沢が従来と異なって道徳も進歩するという説を導入していることは（例えば①441-444）、次にふれるスペンサーとともにこのミルの説を学習摂取しているとみてよい。またここで「手本」といっているのは智育は耳より入り德育は目より入る（②9-11）というのが福沢の道徳普及論であったからである。

学者智徳兼備説はさらにスペンサー『第一原理』への書き込みからも察しがつく。スペンサーが、科学は予見であって究極において善をすすめ悪を避ける目的をもつと断言し、その為には科学者は事象の単純なものから複雑なものに至るまで同等に扱い、能力の及ぶ限り最大限の知識を取り容れるか、総ての人々がとりつかれている狭い知識を取り容れないかのいずれかを選択しなければならない、と言っているところに、福沢は「學術ハ細ナリ大ナリ勉メサル可ラズ君子ハ細行ヲモ顯ル可シ」と書き込んでいる。スペンサーのいう科学者の取る可き態度を指して福沢は儒学でいうモラリストを意味する「君子」と把握したのである。即ち、善を勧め悪を避けるべく予見をするのが「君子」としての科学者なのである。ここから福沢にとって学者は道徳的無色ではありえないということがわかる。

福沢はさらに学者に謙遜さを要請する。「發明シタルモノハ謹テ之ヲ信シ未ダ發明ノ及ハサルモノハ謹テ之ヲ分ラヌモノト為シ今ノ人力及ハサルモノトス」と福沢は『第一原理』に書き込んでいるが、これはスペンサーが科学は宇宙の秩序に対して絶えざる暴露を行ない、そこから発見される法則に対しては謙虚に受け入れなさい、と言っているところである。福沢の書き込みにはスペンサーにない「今ノ人力及ハサルモノトス」が入っているが、これは一種の諦観と思われる。この点についてさらに確認できるのは、スペンサーが科学と宗教との関連について述べている所への福沢の書き込みである。スペンサーは、理解可能なもの（可知界）を科学の領域として、理解不可能なもの

注 (19) H. J. Hanhan, Ibid., p. XX.

（不可知界）を宗教の領域として、前者が進歩すればそれだけ後者も限定されてくるから、科学と宗教とは和解できる、と述べる。福沢はここに「続テ分レハ続テ分ラヌモノガ出ル」と書き込んで、無限の科学による真理原則の探求の問題が同時に無限の不可知界の登場となると理解した上で、スペンサーがその自覚がないと人間世界に通用する応報律で以て自然界を解釈することになる、言い換えれば自然界の因果律は応報律で解釈できない、としている所に「人心ヲ以テ天道ヲ臆測スルハ失敬ナラズヤリードルナド企テ絵ヲ画テゴットシーズエウリングトハ!!」と二重感嘆符を付して書き込んでいる。福沢が「天道」と翻訳した原語は‘the Universe’や‘the Nature’であるが、これを humanity でもって解釈することの誤りをスペンサーにならって彼は要約しているのである。

ここで注意して欲しいのは、徂徠的な天不可知論を色濃く投影させながら、「リードル」以下の福沢の書き込みに相当する部分がスペンサーの原本にはないことである。福沢は人間界に通用する応報律で自然界の因果律を解釈する誤りのポピュラーな例として、「神はすべてを見給ふ」（God sees Everything.）という真理が読本や絵画によって描かれていることをあげているのである。神や天道は不可知界に属する故、それらを人間の想像力でもって可知界として取扱うことは、福沢にあっては、神や天道に対する冒瀆となるのである。不可知界は不可知界として認識能力を超えた世界として認識を諦め、それを人間界に通用する応報律でもって解釈するな、と福沢はここで言っているのである。（この因果律と応報律との関係についてはさらに『覚書』に具体例で以て記し、これを再確認している〔⑦671〕）。

スペンサー宇宙論における可知界と不可知界に対する認識論は、やがて仏教的空観念を媒介として福沢流に翻案され、『福翁百話』の世界において展開されて行くことになるのである。

※本稿は日本イギリス哲学会第5回研究大会（1981年）の報告の一部である。司会者及び参加者から受けた教示に対し尚残された問題の多いことを自覚しつつ謝意を表したい。

（甲南大学法学部助教授）